

13. 準高冷地におけるリーキの新栽培法「大苗深植え栽培」

[要約]

準高冷地におけるリーキの年内どり栽培では、2月に播種し4月に本圃へ仮植して大苗化させ、7月に選抜した苗を深さ10cm程度で植え付けると、慣行栽培より可販収量及び秀品収量が向上するとともに土寄せ回数が削減でき、粗収入の増大も期待できる。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 高冷地研究室

[連絡先] 電話0867-66-2043

[分類] 技術

[背景・ねらい]

近年、県内でリーキの産地化が図られているが、現在一般的に行われている土寄せを4～5回繰り返して軟白長を確保する栽培方法は個体間のばらつきが大きく、葉の間に土が入り品質の低下や調製労力の増加を招きやすい、といった問題点がある。そこで、年内どりにおいてこれらの問題点を軽減できる新たな栽培方法を開発する。

[成果の内容・特徴]

1. 大苗深植え栽培は2月中下旬にチェーンポット（CP-303）に1粒播きしてビニルハウスで育苗し、4～5月に本圃へ2条植で仮植を行い二次育苗を行う（図1）。
2. 7月中下旬に健苗を選んで鍬の柄やイボ竹等で空けた深さ10cm程度の植穴に埋め込む形で定植を行う（図2）。
3. 止め土を含めて土寄せは1～2回行うが、4～5回の土寄せを行う慣行栽培より土寄せ労力の軽減や品質低下（葉の間に土が入る）の軽減が可能となる。（図3）。
4. 大苗深植え栽培は慣行栽培に比べて2週間遅い11月中下旬以降の収穫となるが、生存株率が安定して高く、収穫物のばらつきも小さいことから、可販収量及び秀品収量が向上する（表1）。

[成果の活用面・留意点]

1. 年内どりリーキ栽培の最大の減収要因は軟化腐敗症状によるもので、殺菌剤処理を適宜行い予防に努める。
2. 慣行栽培よりやや葉鞘径の肥大が遅れるため、十分肥大させてから収穫を行う。
3. 本圃定植時の労働負担がやや大きいため、小～中規模栽培での高品質安定生産を目的とした導入がより適する。

[具体的データ]

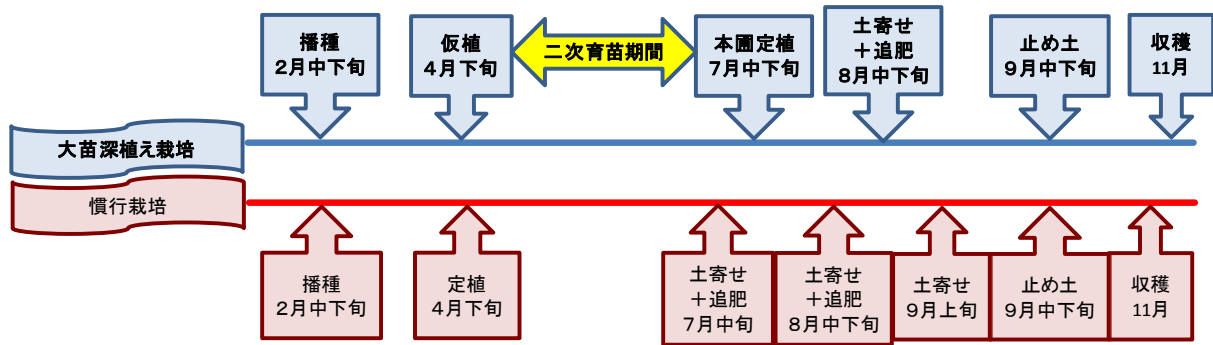


図1 各栽培方法における作業工程



図2 本圃定植作業の様子（鍬の柄で10cm程度の植穴を空け埋め込む）



図3 土寄せ時の土の混入

表1 栽培方法が収量及び品質に及ぼす影響（「MEGATON」2014、2015）

年次	試験区	収穫日	収穫株率 ² (%)	調製重 (g)	葉鞘径 (mm)	葉鞘長 (cm)	可販収量 (kg/10a)	可販率 (%)	秀品収量 (kg/10a)	秀品率 (%)
2014	大苗深植え	11月12日	100	345	35.8	25.8	1,818	89	1,381	61
	慣行	10月30日	96	337	35.4	25.4	1,624	77	1,053	46
2015	大苗深植え	11月24日	84	336	37.2	22.7	1,548	80	1,088	50
	慣行	11月11日	52	348	38.4	24.2	978	48	633	27

² 収穫株率の低下は主に軟化腐敗症状の発生による

[その他]

研究課題名：高冷地域に適した果樹・野菜・花品種の育成・選定と栽培技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2011～2015年度

研究担当者：川村宜久、岸本直樹、信岡佑太

関連情報等：[平成26年度試験研究主要成果、65-66](#)